同志社大学ボート部部報　力漕　第15号

昨年の雪辱果たせず準決勝敗退
初の５分台記録なるが…

創部100周年を迎えた今シーズン，なんとしても全日本決勝へ進みメダルを獲得することを目標にやってきましたが，健闘空しく昨年に続いて決勝進出を果たせませんでした。しかしながら，対校エイトが100年で初の５分台，５分59秒07を記録。この経験を糧に101年目以降の成果につなげていきたいと思います。

～インカレレース結果～

＜対校エイト＞

＜予選＞

2	京都大	3	6′13″54
3	同志社大	4	6′19″18
4	東京商船大	5	6′40″71
5	東北大	1	6′09″28
6	神戸大	2	6′13″21

＜敗者復活＞

2	東海大	3	6′41″01
3	慶応大	1	6′35″86
4	同志社大	2	6′38″69
5	東京商船大	4	6′57″72

＜準決勝＞

2	同志社大	2	5′59″07
3	京都大	3	6′02″18
4	早稲田大	1	5′56″11

スタートは他艇にも劣らず，思いきり蹴って出たが，コンスタントの一本一本を大事に漕ぎすぎてしまい，早くも1000ｍまでに水があいた。焦る気持ちとオールがうまくかみ合わずにそのまま４位でゴールへ。クルーの力が出し切れてなかった。

強い逆風でスタートしたこのレース。1500ｍまで東海大学に頭をおさえられていたが，スパートで爆発。がむしゃらな漕ぎではありながら，東海大学を差し切った。慶応に最後でかわされたものの２位でゴールし，準決勝に望みをつなげた。

京大とは因縁の対決。しかし注意すべきは早稲田だった。降りしきる大雨の中，最高のスタートを切ったものの，コンスタントから早稲田についていくだけで精一杯になってしまった。そのままスパート及ばずゴール。３秒差に泣いた最後のレースとなった。

対校エイト　（coxから，功力，米山，吉田（拓），原田，堀内，宮崎，吉田（武），加藤，内田）

対校エイト６番　３回生　原田昌彦

予選でまさかの敗北を喫した同志社対校クルーは，敗者復活戦で調子を取り戻すことを目標に挑んだ。慶応大学，東海大学，同志社大学の３校が終始トップを狙う形となった。３校とも１歩も譲らず，1500ｍを過ぎたところで東海大学が少し遅れ，慶応大学が優位に立った。慶応大学に追いつく勢いだった対校もそこからの伸びが悪く２位になってしまった。

これを最後のレースにするものかと挑んだ準決勝。相手は早稲田大学と京都大学。京都大学には予選で苦汁を飲まされているので再挑戦のつもりで臨んだ。スタート直前，急に降り出した雨にも動じることなくスタートした。京都大学が１歩遅れをとる。わずかに先を行く早稲田大学をさそうと全員が１つになり足蹴り。しかし早稲田大学の安定したコンスタントは後半になっても衰えず，必死にすがりつく同志社をふり切ってゴール。結局２位になり決勝進出はできず，今年のインカレは終った。

コンスタントでは遅れをとったものの，勝負の足蹴りは負けていなかったと思う。関西選手権が終ってからのコンスタント強化でかなりの力をつけてきた我々も，ここでは通用しなかった。早稲田大学の安定した艇速には教わるところがたくさんあった。

今年準決勝で負けたという結果を素直に受けとめ，創部100周年の夏に出した５分59秒07を来年につなげたい。

～オッ盾レース結果～

＜予選＞

1	熊本大	3	6′13″91
2	緑丘端艇会	6	6′52″98
3	同志社大	2	6′10″38
4	神戸大	4	6′32″57
5	東京大「淡青」	1	6′06″83
6	小樽商科大	5	6′38″49

スタートに問題を抱えたままレースに臨んだためやはりスタートで出遅れた，４艇は1,000ｍまでにおさえることができたが，いつまでたっても東大だけが見えてこず，敗復にまわると不利な立場になることがわかっていたため，必死に追い上げようとする気持ちが逆に空回り，そのままゴールした。

＜敗者復活＞

2	筑波大	3	6′44″28
3	北海道大	1	6′34″41
4	同志社大	2	6′35″16
5	竜谷大	4	6′45″50
6	緑丘端艇会	5	7′12″72

タイムからして，敵は北海道大学だけであることは明らかだった。スタートでやはりうまく出られなかったため前半苦しかったが1000ｍぐらいからは，比較的，楽なレースとなった。しかし，ラスト300ｍぐらいで北大が上がってきて，そのままかわされてゴールとなった。詰めの甘さと忍耐力の弱さが見られたが，準決勝へ勝ち進めた。

＜準決勝＞

2	慶応大	3	7′04″18
3	同志社大	2	7′03″74
4	名工大	4	7′11″37
5	早大Ｂ	1	6′56″62

このレースもスタートから早稲田に出られたままだった。しかし自分の思っていたよりも慶応が伸びていなかったため中盤からずっと慶応との２位争いになってしまった。出られては出ての苦しい展開だった。この日２レース目ということで体力の問題などでラスト300ｍぐらいから崩れだしたが，なんとかコンマ差で慶応をおさえたものの２位となり，夏が終わった。

Jr.エイト（coxから、三野、松城、嶋本、勝本、中西、井上、喜多、谷、押領司）

Jr.エイト４番　３回生　井上賢二

昨年度のJr.クルーは，クルーの内，五人までが二回生という，比較的若いメンバー構成になった。シーズンの始めは，体力不足と技術の未熟さばかりが目についたが，クルーの利点としての若さが持っている勢いが良い方向へ影響しつつ、クルー全員が，レースを重ねるごとに精神的にも技術的にも成長してきた。それは，戸田に行ってからも続き，上り調子で，オックスフォード盾レガッタの準決勝まで勝ち進むことが出来た。

準決勝の相手は，名工大，慶応，早大Ｂであった。早大Ｂは，相当な実力を持っているようだったが，ここまで上り調子で来ているJr.にとっては，十分決勝進出に向けて希望の持てる組み合わせであった。

スタートスパートは，いきなり早大Ｂ，慶応に出られた。しかし，コンスタントで慶応との差を詰め，千三百付近で，半艇身差まで引き離した。早大Ｂは出られたまま見えなかった。技術面の未熟さのためか，ラスト五百で激しくタイム落ちする，というのが今までのJr.のレース展開だったが，今回は，慶応の追い上げから意地でこの半艇身差を守り抜き，ゴールした。やはり早大Ｂは速く，終始，先行されたままだったが慶応と競い合い，あれだけ強気のレース展開ができた事は，Jr.クルーの特に二回生の大きな成長を物語るものであった。

精神的にどれだけタフになれるか，ということがこれからの全日，インカレでの成績につながると思う。勝ちに対する執着心，些細な事でも，日々の練習を勝利に関連させて考えられるような想像力を伸ばすことが，これから同志社のクルーが強くなっていくための鍵になるだろう。

関西選手権　瀬田川杯

７月27～28日にかけて行われた関西選手権，及び瀬田川杯。出艇した各クルーはそれぞれ優勝を目指してレースに臨みましたが，天候もめまぐるしく変わる荒模様の大会となりました。

昨年，東レ滋賀に敗れて惜しくも優勝を逃した対校クルー。今年こそは東レを破り，２年ぶりの優勝を目指して臨みました。予選は滋賀大（経），関西大などと対戦しましたが，朝レ大敗の屈辱を胸に励んできた豊富な練習量に裏付けられた自信から，余裕のレースを展開。予選タイムトップで準決勝へ。準決勝のレースは岡山大などと対戦し，数時間後の決勝を考えてピッチを落としながらも大差で勝利し，必勝をかけて決勝へ。一方，瀬田川杯に出漕したJr.クルーは，予選で立命館大，京都大と対戦。他艇を大きく引き離し，対校とともに予選タイムトップで準決勝へ進みました。準決勝は強風と雷雨に見舞われながらも，阪大などに水を開け余裕でゴール。対校，Jr.クルーはそれぞれ関選・瀬田川杯アベック優勝を狙いつつ，決勝のレースに挑みました。

関西選手権エイト決勝

東レ滋賀	1	4′16″93
三陽電機滋賀	5	4′24″83
神戸大	4	4′21″93
同志社大	2	4′18″91
京都大	3	4′19″51

スタートでいきなり京大が飛び出し，それを必死に追い上げる。足蹴りを途中で何度も入れるがなかなか追いつかない。中盤，逆サイドの東レが，スタートの出遅れを強力なコンスタントで取り戻し，トップへ躍り出る。依然として，京大をさせずにいたが，ラスト200ｍから必死のハイピッチのスパート。京大を抜き，東レにも詰め寄ったものの，２位でゴール。今年も東レの壁を破れぬまま，非常に悔しい結果に終わった。

瀬田川杯エイト決勝

同志社大	3	4′30″93
関西大Ａ	4	4′32″46
神戸大夏闘会	1	4′30″10
陵水艇友会	2	4′30″54

予選・準決勝と違い，スタートで出られず，常に背中を向けるレース展開となった。決勝までの２レースが余裕のあるものだっただけに，クルーに焦りが生じる。800ｍでトップに一艇身差。ここで関大Ａを抜き３位に上がる。残りをスパートの連発で追い詰めるところまで追い詰めたが，結果コンマ差で敗れ，クルーとしての甘さの出たレースであった。

シングルスカル　２回生　竹内秀暢

七月になるまでは僕はフォアに乗っていた。十二月からほとんどずっと同じシートで漕いでいたのだが，なかなか実力がつかず艇自体もかなり煮詰まった状態が続いていた。ミーティングの度に何とかしようとは言っていたが，あまり変化はみられなかった。国体予選終了後，突然スカル落ちが告げられた。関西選手権まで一ケ月足らずというのに…。正直言ってかなり辛かったが，その辛さをどれだけ生かせるかが勝負だと思うとかえってこれが良い転機になると思った。スカルなら個人競技である分，ストレートに実力が出るし。戸惑うこともいろいろあったが，とにかく思いきりよく漕ぐことを心掛けて練習した。大会まで三週間あまりしかなかったのでなるべく長く乗艇した。最初の一週間はかなり無茶をして三度も沈してしまったが，その分艇に慣れるのは早かった。しかし漕ぎの方はそう簡単に変わるものではなかった。スカルに乗ってみて自分の漕ぎのくせがよく分かった。レースでは，とりあえず予選通過が目標だった。まだ真すぐ進むことなどできなかったので，となりのレーンまで突っ込んでいくこともしばしばだったが何とか予選は通過できた。準決勝６はい中，僕は予選タイム４位だったので最低４位には入りたかったが，残念ながら６位に終った。結果はともあれ，この短期間でいろいろな収穫があったので，これを十分に生かして次につながるようにしたいと思う。

フォアＣ　整調　１回生　金咲越郎

このボート部に入ってからというもの，毎日練習であれよあれよという間に夏が来た。僕達一回生は瀬田杯に参加することになっていた。が，果して試合に出るくらい艇を漕ぐことができるようになるのだろうかとずっと思っていた。それまで僕達は体力づくりばかりしていたような気がしないでもない。でも試合が近づくにつれ，艇を漕ぐ時間がぐっと増えた。僕達は２つのグループに分けられ，互いにライバル意識を燃やしながら練習に臨んだ。緊張感の張りつめた練習の日々だった。そして試合の日，全力を尽くした……。結果は無惨なものだった。自分のふがいなさに悔し涙が出た。そんな試合だったが自分なりに何かを得たような気がしている。でも今度は勝つ喜びを味わってみたい。それには練習しかないだろう。苦しくても頑張ろうと思う。

対校フォア２番　２回生　早坂真一

８月，戸田での全日本選手権を見ながら，私は思った。「この漕艇場で漕ぎたかった」と。私はシェルフォアの漕手だったが，瀬田川杯での成績不振のため出漕しなかった。瀬田川杯での満足のいかない成績はなぜだったのか考えてみようと思う。

今回のクルーは秋からの固定メンバーが二人しかいないという，流動的なクルーであった。決定は６月の終わりであった。前回までの反省をふまえ，練習で良いものがでない限り，本番は上手くいくわけがない，という考えのもと練習に励んだ。短期間での仕上げを要するために技術練から実戦的な練習までを行なった。精神的なものを鍛えるということに重点がおかれたのだが，乗艇練習ならびに特に陸上でのトレーニングに常に集中力を持って臨めたかというと，うまくいったとは言い難い。半ばこなす感があったことは否めないだろう。このように試合までの４週間あまりが過ぎた。試合に臨む段階ですでに勝負が見えていたと思う。試合は予選３位で敗復に回り上がったが準々決は３位で終わった。来期は精神面の充実をはかり，練習から取り組んでいきたいと思う。

フォアＢ　整調　１回生　伊藤　崇

ボート部に入部して数ケ月で試合に出られるとは思いませんでした。入部前はボートで必要なのは腕力だと思っていました。腕力さえあればボートは前に進むものだと思っていました。ところが、力を入れても、なかなか進んではくれません。試合で艇をならべてみてよくわかったことですけれど，ピッチは僕達の方が速いのに進み方が全然違うのです。速いクルーは全員の動きがピタリと一致しており，オールの水しぶきの高さまで同じくらいなのです。対校エイトの動きを見て，この動きは一年や二年やったくらいではできないのではないかと感じました。全員が同じ動きをするのがどれほど難しいか身をもって体験しました。瀬田杯での結果はもうわかりきったことです。短期間で強くなれたら誰も苦労しませんし，やる気も失せてしまいます。

これから寒くなり筋トレ中心になると思うけれど，練習中は集中し，常に自分自身に勝とうという気持ちで取り組んで行きたいです。

～４年間を振り返って～

主将　宮崎寿春

僕がボートに出会って，７回目の夏が終わった。クラブの同回生は皆，ボートに別れを告げて社会へ旅立ち，ただ１人，僕だけが８回目の夏を迎える準備をしている。今まで僕を育ててくれた同志社大学ボート部を打ち砕くために。

僕はボートをするために高校へ行き，ボートをするためにこの大学に来た。そして今また，ボートをするために社会に出ていく。だから僕にとって，同志社大学ボート部は単なる通過点になるはずだった。しかし，今振り返ってみると，単なる通過点にしては，やたらに楽しかった事や辛かった事，その他にも様々な事が数多く思い出されてくる。本当に本当に素晴らしい４年間を過ごしたと僕は思う。

主務　岡本竜人

色々な事を考えた。話し合った。喧嘩もした。悩んだ。頑張った。笑った。泣いた。これほどまでに自分をさらけ出し，価値観をぶつけ，自分という人間を見つめたことが今までにあっただろうか。

やはりクラブとは自己実現の場だと思う。ボート部は１つの目標に向かって進むが，何も全員が同じクラブ観を持つ必要はない。部の中でも辿った経緯が違えば，当然クラブ観も違う。断言できるが，大切なのは１人１人が自分の中にきちんと残るものを得るかどうかだ。

結果を出せず，反省点も多いが，自分はいいクラブ生活を歩ませてもらったと思っている。月並みな表現だが，場をくれた部に感謝したい。

副将　谷昌二郎

今シーズンは自分達なりに工夫し，努力したつもりであったが，満足のいく結果ではなかった。練習をどこか，やらされるような感覚でしてしまい，それが甘えにつながったのではと思う。もっとボートを自分から楽しんでやれば苦しい練習が自分の身についたかもしれない。ボートを離れてみてボートの楽しさ，面白さ，そして，合宿生活を含めた全てが自分を充実させてくれるものだということが分かった。現役部員のみんなには，四年間という限られた短い期間，ボートを心底楽しんで，そして自分達以上の結果を出してくれるよう期待しています。

副務・会計　小林重之

ボート部での生活は僕の大学生生活のすべてでした。今，四年間を振り返ってみると，途中ケガをしたこと，そしてマネージャーになってからもつらいことばかりでしたが，その中で自分なりに頑張ってこれたことに大変満足しております。後輩諸君も自分達のやっていること，自分達の目指しているものに誇りをもって頑張って下さい。

学連　下田　亨

終わってみて，今思う事は，自分の仕事がら本当にたくさんの人と出会えて，色々と勉強になった事です。特に百周年記念事業で御指導いただいた貴先輩方には，たいへんお世話になりました。この場をかりてお礼を申し上げます。

自分は，「勝つ」という事に対して間接的にしか協力できませんでしたが，やはり勝ってほしいと思いながら，微力ではありましたが，自分なりに精一杯やってきたつもりです。現役諸君も，切磋琢磨しあって，同志社大学ボート部らしいボート部をつくっていって下さい。

トレーナー　小田切拓

同志社大学ボート部員はみな「勝つためにはどうすればいいか」を常に考えてきたと思う。僕も自分なりにいろいろ考えた。そして，勝てなかった今，「精神力」の大切さを痛感した。「精神力」といっても，根性練をしろ、ということではない。もっと大きな意味での「気持ちの張り」といったようなものだ。そしてそれをつかもうとするひたむきさである。選手には選手の，マネージャーにはマネージャーの仕事があり，その難しさがある。それを認めあいつつ，自分の役割を全うすることに全神経を集中させる，これが大切なのだ。反省は沢山ある。自分としてもこれからの生活で１からやり直そうと思う。現役のみんなも頑張ってほしい。

吉田拓生

私は，同志社大学でのボートに未練があります。心残りがあります。インカレ・全日本で優勝できなかったこと，日本大学に一度も勝つことができなかったこと，自分の頭の中にイメージした艇の走りに達することができなかったことなど満足な成績を修めることができませんでした。これから，今までの様に真剣にボートを漕ぐことがないかと思うと非常に寂しい思いがします。

ボートが好きです。好きだからこそ７年間も頑張ってこれたと思います。後輩のみなさんもボートを好きになってください。そして「打倒日大」です。期待してます。

最後になりましたが，監督，コーチ，部長先生，ＯＢの方々に感謝するとともに，これからも御指導のほど宜しくお願い致します。

勝本　肇

入部したての頃から比べると，引退する今，ものすごくボートが好きになったように思います。苦しかった時のことや楽しかった時のことが，いつか懐かしく思い出されることでしょう。社会に出てからも，何か熱中できることを１つ見つけて，そのことにのめり込んでいきたいです。

功力英俊

七年間に亙るボート生活に終止符をうつ日がやってきたのが，今だに信じられない今日この頃です。先日，京大の対校のメンバーと話しをすることができました。彼らは，今ボートが楽しくてしょうがない，と私に語りかけ，その表情に悲愴感は一片たりとも見えませんでした。後輩諸君には，心底ボートを楽しんでほしい。我々は，ボートが楽しいからやっているということを第一に考えてほしい。スポーツである以上苦しみこそあれ，悲愴感はいらないはずです。

素晴らしい四年間をありがとう。ボート部に携わってこられた全ての人に感謝の言葉を送りたいと思います。ありがとう。

吉田武史

思えばこの４年間，僕は本当に好き放題をやらせて頂いてきたと思います。本当に貴重な４年間であったと思います。皆んなで勝ち取る喜び，自分の力を100％出し切ること。逆境をバネにして自分にとってプラスに向けることｅｔｃ。このボート部で学んだとことは沢山ありますが，これからの後輩諸君も，それぞれ自分のフィールドの中で，精一杯がんばって，皆んなで喜びを勝ちとって下さい。

嶋本貴夫

私は同志社大学体育会ボート部に在籍した事を大変誇りに思う。本来このような事を書くべきなのだろう。しかし，残念ながら，今の私にはそのような確信は全くない。朝日レガッタ後，Ｊｒ．に降格，ヘンリーの出場も叶わなかった私にとって，それは今後の社会人としての活躍如何にかかっていると思う。私は苦しかったこの学生生活を決して，決して無駄にしない決意である。

加藤　康

クラブを引退してから一ケ月半が過ぎた。四時に起きていた生活が既に，信じられない。よくやったと思うが，感傷にひたっている時でもなく，残り一年半ある学生生活を，いかに充実させようかと，先の事で頭は一杯である。後輩達が，昨シーズンの反省を生かし，自分達の納得のいくクラブを創っていってくれたらと思う。主将，頑張って下さい。

小林俊樹

こうして合宿所を出て考える事ですが，将来，大学生の頃を思い出す時，ボート部での事しか思い浮かばないだろうと思います。ボート競技も好きでしたが，合宿生活も非常に楽しいものでした。何も出来ずに過ごしてしまった人達よりも私は恵まれていたと思います。三年半の間，私のボート部での生活の中でお世話になった方々，特にマネージャーの方々，諸先輩方，そして両親に感謝したいと思います。

米山尚吾

私は本当に運の良い奴です。もしあの時，試乗会に行ってなければ，レース前の緊張感，僅か数分間のレースにそれまでやってきたことを信じ，自分の全てをかけてぶつける気迫，合宿生活の楽しさ，辛さなどの貴重な体験はできなかったでしょう。また自分の可能性を知ることもでき，ボートを通じて新しい自分を見出せました。まだまだ未熟な私ですが，これからも可能性に挑戦していきたいと思います。ボートを通じて知り合った先輩，後輩，同輩には本当に感謝しています。

～監督就任四年目にあたって～

同志社大学ボート部監督　横山基嗣

同志社大学ボート部学生の競漕会出漕を目的とした活動を指導するに際し漕艇指導の基本的な理念について確認する。

1）監督及びコーチングスタッフはボート部員の自主性，主体性を重んじ，学生の本分とアマチュアスポーツの精神を尊重する。

2）スタッフはボート部の総力を客観的に理解・掌握し，単年及び複数年計画をもって出漕を目指す競漕会の種類，種目についてボート部部長及び部員の代表と協議し決定する。

3）スタッフはボート部部長と共に後援会の代表者に計画を説明，経過を報告し競漕会出漕の為の活動に要する費用等の援助を積極的に要請する。

4）指導に際しては編成されたクルーの特性を把握すると同時に各漕手の個性を理解しそれぞれの漕力を育成する事に特に留意する。漕手個々の特性を軽視し，いたずらに一つの型にはめる事によって漕力を低下せしめる事を厳に戒めるものとする。

5）漕艇競争は各競漕会が定めた「一定の距離を速さ即ち時間で競うスポーツ」である事を正しく認識し常に念頭に置く事をコーチングの基本とする。

同志社ローイング100年に際し　　1991年10月

部報　力漕
1991年10月　発行
発行　同志社大学ボート部
〒520-21　大津市瀬田3-2-30
TEL 0775-45-0702
FAX 0775-43-1194

編集委員
余谷有紀枝
二瓶伸子